



安徳天皇墓所

西アフリカの伝統打楽器「ジャンベ」

野生の白い孔雀

硫黄岳を望む釣りポイント

俊寛堂

枕崎市少年の船



村営船「みしま」
約1196トン、最高19.1ノット、全長89.5m、定員200人

竹島

黒島

南のお隣さま「三島村」と、人・モノ・心をつなぐ フェリー「みしま」の枕崎就航を 実現させよう！



◀市民有志がつくる「枕崎まち興し同志会」により、
枕崎就航実現を願う横断幕が、駅通りに掲げられました。

■ 空気の澄んだ晴天の日、南の海に見える竹島、硫黄島、黒島。海を挟んでお隣りにある「三島村」と枕崎をフェリーによる定期航路で結ぼうという取り組みが始まっています。今月号では、この取り組みの経緯と、航路実現により本市にとってどのようなメリットがあるか述べてみたいと思います。

■ 取り組みの経緯

現在、三島村（竹島、硫黄島、黒島）と県本土とは、村営のフェリー「みしま」（鹿児島港・三島間）により1泊2日の航海で月13回結ばれていますが、これ以外に三島村と県本土を結ぶ公共交通機関はないため、フェリー「みしま」が三島村民の日常生活に欠かせない重要な唯一の航路となっています。

しかし、利用者が少なく国・県から毎年多額の補助を受けて運航している状況にあることから、現在、三島村と枕崎市等で「三島村新交通ネットワーク協議会」を設立し、フェリー「みしま」を枕崎港に寄港させることにより利用増を図れないか、調査検討を行っています。

■ 航路延伸の目的と効果

① 三島村民の利便性の向上と枕崎からの物流の促進
三島村と鹿児島港とを結ぶ

現航路では、一番遠い黒島（片泊港）まで約6時間近くかかります。しかし、枕崎市はわずか50分程度しか離れておらず、フェリーで約2時間程度と、半分以下の時間で結ぶことができます。航路延伸が実現すれば、三島村民の利便性が大幅に向上するとともに、日常生活用品などを中心とした枕崎港からの新たな物流が生まれることとなります。

② 三島村と枕崎市の人的交流の促進
三島村と枕崎市は、明治28年の「黒島流れ」をはじめ歴史的につながりも深く、現在も「少年の船」等で交流があることから、航路延伸により、三島村と枕崎市の人的交流がますます盛んになることとなります。

③ 枕崎から三島に向けた新たな観光ルートの創設と経済活性化
三島村には現在も噴火を続ける硫黄岳や、東温泉・坂本



枕崎航路実現に向けて
一緒に頑張りましょう

三島村 大山辰夫 村長

▼ なぜ、近いのにいけないのだろう。
幼い頃、父と漁に出て馬船の上から見える枕崎を見てはそう思っていました。現在、行政をあざかりその理由や、歴史的な経緯がわかりました。

▼ 昭和8年、鹿児島市と三島村を結ぶ初めての村営船「としま丸」150トンが就航しました。
当時の村長は、資金調達に奔走し、国道建設の資金枠融資で「としま丸」を建造しました。その記念碑に刻まれているのが、「汽船もまた道路なり」という名

言であります。

それより以前は、木造の手作り帆船で、危険を冒しながら、枕崎までを往來していた時代もあったと聞いています。

現在は、月13回鹿児島市と結んでいますが、村民の願いは一日一便です。実現のために最も近い、枕崎港への航路の延伸を要望して来ましたが、その思いが今、国に認識されようとしています。

▼ 20年度、三島村と枕崎市は県、国と協力し協議会を結成し枕崎への試験運航を実施しました。21年度から3

温泉など多くの温泉をはじめ、手つかずの自然があふれています。また、島流しされた僧俊寛に関する遺跡や、安徳天皇にまつわる遺跡など、歴史的・文化的にも貴重な資源が豊富にあります。さらに、西アフリカの打楽器ジャンベを使った「みしま」ジャンベスクールなど、芸術面でも素晴らしい素材があります。

■ 今後の事業展開

今回の調査結果を受けて、本年4月以降、3年間にわたる本格運航に向けた実証運航が実施される予定です。

枕崎と三島村を定期航路で結ぶには、たくさんの方々からフェリーを利用していただくことが重要です。そのために、更なる三島村との交流を図っていく必要があります。

今後のフェリー「みしま」の枕崎就航の実現に向け、ご理解とご協力をお願いします。

年間、実証運航を行う計画です。試験運航を通して多くの課題や問題点も出てきました。航路を維持運営していくための採買船や航路規制の緩和、定期船の安全接岸のための港湾の整備等です。しかし、これらの課題は遠洋カツオ漁等、進取の気概を持つ枕崎の皆様と三島村が協力すれば必ず解決できます。

▼ 先日、枕崎市民の方から「枕崎にとってうれしいニュースだ」という話を聞いて私も嬉しくなりました。この航路は、三島村だけではなく枕崎の皆様にとってプラスになるのです。一人でも多くの市民の皆様にご利用いただき、この航路から新しい人と物の交流が生まれより強い枕崎との絆が生まれることを願っています。

厳しい社会情勢の中で三島村が生きていくためにもこの事業を成功させ、未来へと続く枕崎への「海の道路」を築きたいと思っています。

枕崎就航に向けもつた三島村の「てを」を知りたいため、来月号から「三島村ジャーナル」が始まります。